

## 240 年の歴史を持つ林石材産業

八柳 修之



県道 32 号線、バス停「川名御霊神社」の斜向かいに林石材産業の加工場、大きな虎と観音菩薩の石像があることは知っていたが、石材所の由来を書いた看板を今までよく見ていなかった。風雨にさらされて判読しにくい、林家の由来についてこう書いてある。「今より約 1100 年有余年前、桓武天皇の玄孫平良文公が勅命により関八州を治めるため京都より村岡に移住して館を構えたと伝えられている。私達林家の先祖はそのときの平良文公の家来であったと言われ、その子孫も現在も村岡宮前等に居住している」と書かれている。同社はホームページを持っており、本鵜沼 3 丁目に本社があり、創業は天明元年 (1781)、現在、藤沢、大庭台墓苑など 8,000 基以上の施工実績があると書かれている。伺うと現社長は 8 代目、長らく村岡村宮前で鎌倉石の砕石を行っていたが、大正 13 年に本町二丁目に移り、昭和 11 年、(株) 林石材産業として本鵜沼に移り、川名は加工所・倉庫とのことである。

操業が天明といえ、天命の飢饉、浅間山の大噴火があり大飢饉となったことが知られる。餓死者が多数出て墓石の需要も増えたと思われる。石の需要はまた災害、火事と相関関係にあると思われる。廣田三郎著「村岡史話」によると、「弥勒寺、小塚、高谷にある山はいわゆる鎌倉石という砂岩。明治の藤沢大火のあと家屋建築の土台石、蔵などは村岡から運ばれたものが多かった。川名の沢内氏、河原の三浦氏、宮前の林氏、小塚の金子氏、高谷の沼上氏も皆関係者である」。藤沢宿にはまちを焼き尽くした三大火災 (明治 12 年、13 年、16 年) があり、なかでも明治 13 年の大川の火事は町を総なめにし遊行寺の伽藍、遠くは柄沢まで飛び火した。鎌倉石は細工し易いため、以来、防火のため蔵、外壁などによく使われた。

宮前の採掘現場跡は東海道線上り、藤沢～大船間の右側車窓から見られるが、現在は鎌倉石が掘りつくされ採掘していない。鎌倉石は砂岩でお墓には適さない。墓石となる花崗岩は国内では枯渇し、日本石材工業新聞 (HP) によると、花崗岩の製品輸入は 2015 年、53 万トン、金額にして約 700 億円、約 9 割が中国から、インド、イタリアと続く。新しい統計はないが、昨今のお墓事情から輸入量は減少していると思われる。そう言えば、最近、お墓の勧誘電話はかかってこなくなった。もう死亡者リストに入っているのかも。  
完